

卒業生だより



公認会計士

そして社外役員へ

昭和62年卒

中森 真紀子

学部では経営学科の野村秀和先生のゼミで管理会計・企業分析を学びました。卒業後は民間化して間もないNITに入社し、経営企画本部に配属されたが3年で結婚退職。その後、再就職を希望したものの、門戸は狭く壁につきあたりました。模索する中で、公認会計士の資格を取って仕事に戻れたのは、ゼミで会計や企業分析に触れていたおかげです。模範的な学生ではありませんでしたが、きっかけを与えて下さった野村先生そしてゼミの先輩、同期には感謝しています。

キャリアアプエンジニアした後、大手監査法人に5年半勤務した後、独立して自分の事務所を構えました。もうすぐ30年になります。転職は2000年、今までやったことのない仕事と巡り合いました。ある企業から、社外監査役に依頼されたのです。監査法人に勤務していた時に、その会社の上場準備をサポートしたご縁でした。コーポレートガバナンスが注目される時代の流れもあって、その後も様々な会社で独立社外役員を頼まれ、引き受けてきました。専門分野だけだった自分の視野も徐々に広がり、経営の現場に関わることへの興味は尽きません。京大経済学部で過ごした日々が企業経営への興味を育んでくれたのだと思います。

今の一番の関心はジェンダー・ダイバーシティです。入学当時、経済学部の同期女子は全体で約200人のうち10人ほどでした。就職した年は男女雇用機会均等法施行2年目。総合職という言葉自体もまだ目新しく、結婚したら家庭に入るといったのも女性の普通の選択肢でした。今、ライフイベントがあっても女性が働き続けることは当たり前になりましたが、まだ本場に平等な条件で働く環境が整っているとは言えません。日本の2024年のジェンダーギャップ指数は118位。加えてこれからの人口少子化・高齢化をどう解決していくかということは、多くの企業の経営課題でもあります。社外役員という客観的な視点を求められる仕事を通じて、今の自分にできることを考え、働きかけを続けていきたいと思います。



現在の組織・立場で
主体的に活動を

平成18年卒

三王 知行

平成18年に経済学部を卒業し、公認会計士として勤務して18年が経ちました。ご存知の通り公認会計士は監査及び会計の専門家であり、財務書類その他の財務に関する情報の信頼性を確保することにより、会社等の公正な事業活動、投資者及び債権者の保護等を図り、もって国民経済の健全な発展に寄与することを使命としています。

大学では諸電ゼミに所属しました。先生の専門は財政・環境のゼミですが、募集初年度ということで個性的な学生が集まり、就職後にすぐに退職し今は会社員と研究者の二足の草鞋を履く友人や、大手企業から転職しベンチャー企業の役員となった友人と出会いました。

公認会計士の仕事は、直接的に財政・環境に関わる仕事ではありませんが、非営利法人等の監査業務を通じて知識のつながりを感じています。

諸電ゼミでは先生・現役生の尽力により、定期的にゼミの同窓会が行われており、様々な業界で活躍している卒業生の話を聞くことが非常に刺激になっています。

卒業後は監査法人トーマツ京都事務所で2年半ほど勤務し、独立開業しました。その後、トーマツ時代の先輩にひかり監査法人での非常勤業務を紹介いただき、その後社員（一般企業における取締役）に就任し8年ほど経ちました。

ひかり監査法人は京都に本部があり、近年は東京・福岡に拠点が拡大しており、常に人の縁の大事さを感じています。

令和4年の公認会計士法の改正により、上場企業の監査を行う監査法人はより高い規律付けが求められています。私は通常の監査業務に加えて、品質管理担当として事務所の品質管理業務（個別の監査業務のチェック、監査法人の規程・監査マニュアルの作成等を担当しています。毎年のように法律・規則等が改正されるため、日々アップデートが必要で、主体的に監査法人の規程等に反映させることが求められています。

所属する監査法人はまだ中小規模であり、各領域で活躍する卒業生と自らを比べてしまうことも多いですが、現在の組織・立場で主体的に活動することが社会への貢献につながると考え、これからも精進してまいります。

10年後、30年後の

未来に向けて



平成24年卒

長野 弘和

卒業から10年余りが経過したこのタイミングで、30代の卒業生として寄稿するという機会を頂きましたので、10年、30年というスパンで、これまでの振り返りと今後の展望について書いてみたいと思います。

私は2012年に大学を卒業後、メガバンクに入行しました。約4年間の営業経験を経て、経営企画部に異動し、リサーチ、シンクタンクでのエコノミスト業務、税制改正要望活動、経営トップの対外活動サポート等、この約10年の間に様々な業務に携わりました。一昨年度は、当社グループの中期経営計画を策定するプロジェクトチームに専従し、昨年度からはその中期経営計画を着実に進めるべく、経営管理に挑戦しています。

奇しくもこの3月にはマイナス金利が解除され、いよいよわが国経済が再成長に転じようとする動きを肌で感じています。1989年というバブルの最終局面に生まれ、人生の大半を「失われた30年」の中で過ごしてきたこともあり、「このチャンスを逃してはならない」と強く感じています。中期経営計画でも打ち出したように、これからの30年を、経済の成長とともに社会課題が解決に向かい、そこに生きる人々が幸福を感じられる「幸せな成長」の時代としたい。この目標を実現すべく、今後30年間は続くであろう社会人生活の中で、微力ながら貢献したいと思います。同窓の皆様にはお世話になることも多いかと思えますので、引き続きよろしくお願いたします。

一方、私生活では、ワインやキャンプをはじめ、この10年で様々な趣味と出会いました。日本ソムリエ協会のワインエキスパート、日本キャンプ協会のキャンプインストラクター等、趣味が高じて資格も取得し、家族には呆れられています。次、深い人間を目指したいと思えます。

最後になりましたが、10年後には長男が大学受験です。親のエゴかもしれませんが、私と同様に希望に満ち溢れた顔で京都大学の門を叩いていることを少しでも期待しつつ、筆を置きたいと思えます。

「なぜ」の思考と友人と



平成31年卒

朱 暁

2019年に大学を卒業し、新卒で大手航空会社に入社しました。運航の現場業務を経験した後、現在は東京で全社の予算策定に加え原価分析、ひいては航空事業の分析業務に携わっています。

仕事でいつも意識していることを一語で表すとそれは、「なぜ」。振り返るとこの意識は、京都で過ごした4年間で染みついた感覚なのかもしれません。なぜこの手法だと適切に評価できないのか、なぜこの段階でこれを検討すべきなのか。そしてそこから広がる「ではどうすれば」の問いが、今の思考の土台になっていると思うと、私のなぜ、とどうすれば、に呼応して一緒に議論に乗ってくれたゼミの同期をはじめとする同輩や先輩後輩に、今更ながら感謝の気持ちが湧き立つ思いです。

ご存じの通り航空業界は、コロナ禍に大きな試練を受けた業界の一つです。2020年東京五輪に向け波に乗ろうとした勢いが一転、長く暗いトンネルに迷い込みました。当時私は関西空港で勤務をしていましたが、待っていたのは伽藍堂のロビーと仕事がない苦悩。社会人2年目で、得体の知れぬ焦燥感を感じずにはいられなかったことを覚えています。その時支えの一つとなったのも、「なぜ」の思考と、大学の友人たちでした。なぜ今この境遇にと思えば、本を読み知識を蓄え、機を見て同期と集まっては知を発散する。母校を共にする聡明な同志たちから受けた刺激と快楽は、確と記憶に刻み込まれ、今に繋がっていると感じています。「航空会社で環境政策を作りたい。」コロナ禍が明け、空港や機内に多くの楽しそうな笑顔が戻ってきたのを見ると、入社を決めた小さな目標を改めて見つめ直し、与えられた仕事に気を引き締める、そんな気持ちでいます。

仕事でも私生活でも、老若男女、大学の同窓生とお会いするとふと嬉しい気持ち湧くのはなぜなのでしょう。考えることをやめ、たまに京都を訪れてみても、結局はそれぞれで活躍するその多くの方々に想いを馳せ、空から眺める京の街にどこか後押しされているような気がします。